

## 巻頭言

## 疾走する文化

高度情報科学技術研究機構 理事長  
田島 保英



以前、エンジニアリングの過剰、と書いたことがある。服用薬の主流が丸薬・粉薬からレンズ豆型に移行し、現今は浅い円筒の上下の底を膨らませた形状が大勢のようだ。しかし、これを一旦つまみ損ね卓上にこぼすと、ときに正立して平滑に磨かれた天板を縁まで転がり、床に落下してもなお走行を止めず、剩え家具の隙間に消え入って了ったりする。そこに錠剤形状管理の厳密を見たのだが、それは錠剤の医薬としての目的とは別方向の、製造法の発達の結果するところだと推察したことによる。周囲を観れば、我々貝肉に似た「いきもの」は現代の徹底した品質管理の施された工業製品の形象の只中に暮らしており、完璧な円や直線や企まれた曲線の密林の間隙を縫って棲息している。

全体、どう足掻いても徹頭徹尾「個」であり続ける外ない我々「いきもの」存在は、「意識」を投射幕として「外界」との対応を測りつつ認識を重ね、「内界」に、謂わば、存在のデジタル・ツインを構築しているのだが、当今その仕組みや構造の科学的説明を試みる脳科学が喧しい。

攻城の起点は多様で、脳神経科学や統計心理学などの古典的、疫学的手法から、化学的、物理学的手法を駆使して脳組織の分子レベルでの構造・機能解明を目指す医工学的アプローチや脳機能の量子論的理解を探ろうという新参者まで多種多様に及び、その全容は

俄かには見晴らせないほどだ。そうして、それらのいずれもが心強い道具として広く深く採用しつつあるのが、計算科学的手法である。とりわけAIの本質的活用を伴った探求が研究の最先端を形成していると思われる。さらに、AI自体も急速に進化し、生成AIの登場、実用化によって、AIは人類が手にした最強の道具或いは恒常的に信頼のおける忠実・勤勉な助手としてだけでなく、今や人知を知力・思考力いずれの点においてもはるかに凌駕し、その利用の仕方次第で「いきもの」に対する最大の脅威となり得るとさえ目される存在に成り上がった感がある。やがては、人類史の全体と宇宙史・物質史の総体をデータとして抱える究極の推論式が「AI神」として全ての「いきもの」の頭上に君臨する瞬間が到来するのかも知れない、という妄想も頭をよぎる。言うまでもなく「部分」が「全体」を飲み込むことは不可能事であり、「内界」が「外界」を食い尽くすこともできはしない。が、それと見せかける「elegant solution」を演出することは可能だろう。それにしても、「AI神」の出現までには幾許かの時間が残されていることが幽かな救いに思える。

より短期的には、計算科学によって人類社会における「エンジニアリングの過剰」は今後さらに度を強めるだろうし、学術の世界でも、真理探究を旨とする理学、とりわけ応用物理や化学は「AI for science」の浸透によっ

て研究者の知恵の出どころも大きく変わって来よう。事情は経済学や社会学などの人文科学、ことによると文学でさえも同様だろうと思われる。

懸念もある。世は挙げて「職能家」の時代だ。社会のあらゆる局面で様々な種類の「職能家」が表面に露出し、真の智者達はその背後に沈潜して影もない。今後も様々な分野でその場面に適合した職能家たちは活躍を続け、社会の変化は加速し続けるだろう。「疾走する文化」の時代だ。文化の疾走は、次々と新たな職能家を生み、古くなった職能家を振り捨てて突き進む。仮に人間存在を「leader」、「follower」、「historian」に三分すれば、局面の勝者である職能家は文化のその時々の変化を先取りしてleaderを僭称し始め、状況を把握・分析し物語として説明するhistorianは内心狼狽えつつもleaderに折り合うように身を沿わせ、残余の大衆であるfollowerは不可解な時空を鼻面を掴まれて引っ張りまわされる。「疾走する文化」はやがて幾度かの変異を遂げた挙句、人類が偶さかに、そうして、辛うじて辿り着いた「大衆消費社会」という名の「文明」を危殆に瀕せしめるかも知れない。なぜなら、局所的関心と利益をエネルギー源とする「疾走する文化」は「理想」や「崇高」を顧みないからだ。その行先に「価値」や「意味」を求めないからだ。嘗てイギリスの作家G.Orwellは、その

「ウィガン波止場への道」の中で、進行する生産の機械化と労働・生活との関係を論じ、H.G.WellsやA.Huxleyを引き合いに出しながら「brains in bottles」の不毛を説いた。機械化の進展は、その究極に個々の労働者を無為の肉塊と化せしめる、との論だが、無為の「いきもの」には自らの生存を確保できない、という経済の悪意を度外視していた。

形式論理学ただ一つを手を知を積み上げてきた人類が、図らずも自らの存在が機械論的決定論の下僕である真実に突き当たろうとしているかのような此の今の今。

苦役からの解放、不快からの解放、そうして、思い悩むことからの解放を目指して文化は進化し文明が築かれた、と牧歌的に思いなしたとしても、誰もがかかけえのない「個」である「いきもの」が、「意味」や「価値」に思い煩うことを避けてしまう、そんな生存の仕方が良いのか知ら。幼児語や軽口や断片的フレーズの横溢する「カタコト言語空間」に身を置き、疾走する「カタコト文化」に身を浸して、首尾のある物語としての「個」の生涯はA Iの調製する文章表現に頼る「brains in bottles」存在に甘んじていて良いのか知ら、そうして、たとえ生存が辛うじて保証されたとしても「いきもの」の面白可笑しい賑わいがあとどれほど続くのか知ら、と日々あれこれ考えている。